

浙江省 2017 年 4 月高等教育自学考试

日本文学选读试题

课程代码:00612

请考生按规定用笔将所有试题的答案涂、写在答题纸上。

选择题部分

注意事项:

1. 答题前,考生务必将自己的考试课程名称、姓名、准考证号用黑色字迹的签字笔或钢笔填写在答题纸规定的位置上。

2. 每小题选出答案后,用 2B 铅笔把答题纸上对应题目的答案标号涂黑。如需改动,用橡皮擦干净后,再选涂其他答案标号。不能答在试题卷上。

一. 次の文の____の部分に入れるのに最も適切なものを、A・B・C・D から一つ選びなさい。
(2 点×10=20 点)

- 「雪国」、「千羽鶴」、「山の音」、「古都」等でノーベル文学賞を受けた作家は____である。
A 芥川龍之介 B 大江健三郎 C 川端康成 D 大宰治
- 夏目漱石の「____」は「上 先生と私」「中 両親と私」「下 先生と遺書」の三部から成り立っている。
A 坊ちゃん B 三四郎 C ころも D それから
- 「徒然草」は____の随筆集である。
A 松尾芭蕉 B 吉田兼好 C 鴨長明 D 紀貫之
- 「____」全体としては、華やかさの中に寂しさがただよっている感じがある。
A 万葉集 B 古今集 C 新古今集 D 千載集
- 瀬戸内晴美は女流作家で、昭和 48 年に、中尊寺で得度受戒、仏子号は____である。
A 慈遍 B 慈静 C 寂静 D 寂聴
- ____は中国大陸や西域を題材にした「天平の薨」「楼蘭」「敦煌」など書いた。
A 桑原武夫 B 井上靖 C 東山魁夷 D 森本哲郎
- 山の手線の電車で跳ね飛ばされて怪我をした、その後養生に、一人で但馬の城崎温泉へ出かけた。それは____の「城の崎にて」の冒頭部分である。
A 川端康成 B 大宰治 C 志賀直哉 D 夏目漱石
- 「閑かさや岩にしみ入る蝉の声」の俳句の作者は____である。
A 小林一茶 B 松尾芭蕉 C 紀貫之 D 与謝蕪村
- 「富嶽百景」は____が、御坂峠の天下茶屋を訪ね、富士とともに暮らした時期を題材にした小説である。御坂峠には「富士には月見草がよく似合ふ」の文学碑が立っている。
A 川端康成 B 大宰治 C 志賀直哉 D 夏目漱石

10. 「土佐日記」の作者は_____である。

- A 鴨長明 B 松尾芭蕉 C 吉田兼好 D 紀貫之

二. 次の_____の言葉の解釈として、最も適当なものを、A・B・C・Dの中から一つ選びなさい。
(1点×10=10点)

11. 車がひっきりなしに明るいヘッドラインを光らせて通る。

- A 申し訳なく B 絶え間なく C しょうがなく D 間もなく

12. 一夜、父は倅を伴い、ある豪家に至った。

- A 従卒 B 下級の軍人 C 見張番 D 自分の息子

13. 男はいまいましそうに歯をかみならし、かれを見詰めている様子だった。

- A 悔しくて腹立たしように B 思いどおりにならなくて、いらいらするさま
C 態度や心が落ち着かないさま D 見ていられないほどに可愛いそう

14. 男がぎこちない微笑を浮かべ、しゃっちょこぼって立っていた。

- A 自然な B 不自然な C なめらかな D おだやかな

15. 慌てて立ち上がろうとしたはずみに腰がぎくりと落ちて激痛が走った。

- A はねかえること B 事が進行してゆくうちについた勢い・調子
C 金品をはずむこと D ある事がきっかけとなって次の事が起ること

16. 「富士山には、もう雪が降ったでしょうか。」

私は、その質問に拍子抜けがした。

- A おどろいた B 張り合いがぬけた C こまった D 迷った

17. だしぬけに障子を開けて一人の男がのっそり入ってきた。

- A 静かに、日と目に付かない状態にいるさま
B 動作が鈍くて、ゆっくりしているさま
C 人に知られないように、ひそかに物事をするさま
D すばやく手際よくことを行うさま

18. 踊子が玄関の板敷きで踊るのを、私は梯子段の中途に腰を下ろして一心に見ていた。

- A ころろを一つにして見ていた B ころろをこめて見ていた
C ころろをおににして見ていた D ころろをやぶって見ている

19. 恐らく下人は、何の未練もなく、餓死を選んだ事であろう。

- A 諦めきれないこと B まだ熟練していないこと
C 修練不足で十分な域に達していないこと
D 思いがけないこと

20. 私は、しっとりと潤いのある道は描きたかった。

- A 落ち着いてしとやかなさま
B 雰囲気がしずかで落ち着いているさま
C 軽くしめり気を含んでいるさま
D 動作・行為を着実・真剣に行うさま

注意事项:

用黑色字迹的签字笔或钢笔将答案写在答题纸上,不能答在试题卷上。

三. 次の文の____の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

(1点×10=10点)

21. その黒い髪には目立つほど銀色の白髪が混じっている。
22. やがて、火は衰えました。
23. 心地よい圧迫が弱まってゆき、消えていった。
24. 遂に蛇口が破裂して、水の激しく噴き上げる光景が静子の頭をよぎった。
25. その後養生に、一人で但馬の城の崎温泉へ出かけた。
26. 私は一目見て、狼狽し、顔を赤らめた。
27. 踊子はやはり唇をきつと閉じたまま一方を見つめていた。
28. ある仕事をして、それが円満に成就した時の、安らかな得意と満足とがある。
29. 経済的な援助がなくなってしまった。
30. 村に出た時は、もう日が暮れて夕闇ほのぐらいころであった。

四. 次の1から3までの文章を読んで、それぞれの問いに答えなさい。

。。。。。。 前略。。。。。。

あくる朝の九時過ぎに、もう男が私の宿に訪ねて来た。起きたばかりの私は彼を誘って湯に行った。美しく晴れ渡った南伊豆の小春日和で、水かさの増した小川が湯殿の下に暖く日を受けていた。自分にも昨夜の悩ましさが夢のように感じられるのだったが、私は男に尝试してみた。

「昨夜はだいぶ遅くまでにぎやかでしたね。」

「なあに。聞こえましたか。」

「聞こえましたとも。」

「この土地の人なんですよ。土地の人はばか騒ぎをするばかりで、どうもおもしろくありません。」

彼が余りに何げないふうなので、私は黙ってしまった。

「向こうのお湯にあいつらが来ています。一ほれ、こちらを見つけたと見えて笑っていやがる。」

彼に指さされて、私は川向こうの共同湯の方を見た。湯気の中に七八人の裸体がぼんやり浮かんでいた。

ほの暗い湯殿の奥から、突然裸の女が走り出て来たかと思うと、脱衣場のとっぴなに川岸へ飛びおりそうな格好で立ち、両手を一ぱいに伸ばして何か叫んでいる。手拭いもない真っ裸だ。それが踊子だった。若桐のように足のよく伸びた白い裸体を眺め、①私は心に清水を感じ、ほうっと深い息を吐いてから、ことこと笑った。子供なんだ。私たちを見つけた喜びで真っ裸のまま日の光の中に飛び出し、つま先で背いっぱいに伸び上がるほどに子供なんだ。②私は朗らかな喜びでことことと笑い続けた。頭がぬぐわれたように澄んできた。微笑がいつまでもとまらなかった。

踊子の髪が豊か過ぎるので、十七八に見えていたのだ。その上③娘盛りのように装わせてあるので、④私はとんでもない思い違いをしていたのだ。

。。。。。。 後略。。。。。。

(川端康成「伊豆の踊り子」より)

問い 31. 傍線部①と②は「私」の心情を述べた文である。なぜそのような気持ちになったのか。読んだ小説前後を思い出しながら 50 字以内で答えなさい。

(5 点)

問い 32. 傍線③「娘盛り」の意味を簡潔に説明しなさい。

(3 点)

問い 33. 傍線部④なぜ「私」はとんでもない思い違いをしていたのか。文中の言葉を使って答えなさい。

(5 点)

。。。。。。 前略。。。。。。

なぜ、失われたものが両腕でなければならないのか？僕はここで、彫刻におけるトルソーの美学などに近づこうとしているのではない。腕というもの、もっと切り詰めて言えば、①手というものの人間存在における象徴的な意味について、注目しておきたいのである。それが最も深く、最も根源的に暗示しているものは何だろうか？ここには実体と象徴のある程度の合致がもちろんあるわけであるが、それは、世界との、他人との、あるいは自己との、②千変万化する③交渉の手段なのである。言い換えるなら、そうした関係を媒介とするもの、あるいはその原則的な方式そのものなのである。だから、機械とは手の延長であるという、ある哲学者が用いた比喻は、まことに美しく聞こえるし、また恋人の手を初めて握る幸福をこよなく讃えた、ある文学者の述懐は、不思議に厳粛な響きを持っているのである。どちらの場合も、極めて自然で、人間的である。そして、例えばこれらの言葉に対して、美術品であるという運命を担ったミロのヴィーナスの失われた両腕は、④不思議なアイロニーを提示するのだ。ほかならぬその欠落によって、逆に、可能なあらゆる手への夢を奏でるのである。

。。。。。。 後略。。。。。。

(清岡卓行「ミロのヴィーナス」より)

問い 34. 傍線部①手というものの人間存在における象徴的な意味とは何か。文中から探して答えなさい。(5 点)

問い 35. 傍線②「千変万化」の読み方を書きなさい。(2 点)

問い 36. 傍線③「交渉」の解釈として、最も適当なものを、A・B・C・Dの中から一つ選びなさい。(2 点)

- A 掛け合うこと B 釣り合うこと
C 関わりあうこと D 押し合うこと

問い 37. 傍線④不思議なアイロニーとは何か。文中から探して答えなさい。(5 点)

①月見草の咲くころになると、私は彼女に会いに山間の沢の蛍を見に行かなければならないような気分になる。

その少女は良い酒のわく霧の深い盆地の山裾にある森近という名の村に住んでいた。バス通りから二十分も小径を登った丘にある彼女の家のわきには小さな沢が流れていて、彼女の祖母がよく米をといだり野菜を洗ったりしていた。口に含めば、そのまま 飲み下したくなるほどの甘いきれいな山の水だった。

..... 中略.....

彼女は死んだ父親の生まれた森近の家に帰ってきたがもちろん祖父母の顔も覚えてはいなかった。彼女が遠い都会の義父の家から森近の家に帰ってきた時、祖父母は彼女に昔のことを思い出させようとして言った。

「..... 中略.....」

しかし、彼女は全く何も覚えていなかった。森近を去ったころ、まだ三歳にもなっていなかったのだから。

②「_____」

彼女は長い睫を伏せて悲しげにわびた。

③「_____」

祖母はがっかりして首を振った。

..... 中略.....

「わたし、思い出したわ。ずっと昔、確かにここで、この沢で、こういうふうに飛ぶ蛍を見たことがあったのを。わたしがいつもいつも思い出そうとして、思い出せなかったのはこれだったわ。お母さんが死ぬ時言ったのよ。ほら、人の魂が飛んでいる、って。ぼっぼつと飛んでいるのを、いつか森近で一緒に見ただろう、と言ったのよ。

..... 中略.....」

彼女は舞い光る蛍の火を両手で抱かかえるしぐさで歌うように言った。

「 ほう ほう ほおたる 来い

こっちの水は ああまいぞ

ほう ほう お父さん

ほう ほう お母さん

ほう ほう _____」

